健康づくり・スポーツ推進特別委員会行政視察概要

１　視察月日　　令和６年１月15日（月）～16日（火）

２　視察先及び視察事項

（１）京都府

　　サンガスタジアム by KYOCERA の取組について

（２）大阪府東大阪市

　　誰でも楽しめるウィルチェアスポーツの振興について

３　視察委員

　委　　員　くしだ　久　子

　　同　　輿　石　かつ子

１　視察月日　　令和６年１月15日（月）～１月16日（火）

２　視察先及び視察事項

（１）京都府

　　サンガスタジアム by KYOCERAの取組について

（２）大阪府東大阪市

　　誰でも楽しめるウィルチェアスポーツの振興について

３　視察概要及び視察資料　　別添のとおり

視察概要

１　視察先

京都府

２　視察月日

１月15日（月）

３　対応者（役職名）

合同会社ビバ＆サンガスタジアム長　（受け入れ挨拶・説明）

４　視察内容

（１）サンガスタジアム by KYOCERAの取組について

ア　事業内容、施設

2020年1月に京都府亀岡市に建設費約１５７億円で建設された国際試合の可能な球技専用型スタジアムであり、複合スタジアムとして、ｅスポーツ施設やＶＲ／フィットネスゾーン、スポーツクライミング、フードコート、保育園なども併設されている。運営に関しては指定管理者の合同会社ビバ＆サンガが10年契約で行っている。

（ア）スタジアム

・サッカー・ラグビー・アメリカンフットボールなどの球技専用フィールドである。

・最大収容数は２万1600席でスタンド最前列からピッチまで７．５ｍの臨場感あふれる観戦環境であり、全席屋根で覆われている。

（イ）ｅスポーツゾーン

・建設時より計画された施設で、高性能パソコンを20台ほど導入しており、一般利用も可能である。

・ｅスポーツの国際大会の開催や配信などを行う。

・小学生向けのプログラミング教室の開催など次世代の人材育成の場を企画している。

・大会の裏方を担う運営や配信に携わる人材を育てるための試みも行っており、京都先端科学大学の学生が映像や音響を学ぶ実践する場にもなっている。

（ウ）ＶＲ／フィットネスゾーン

ヨガやストレッチなどのレッスンが受けられるスタジオの他、ＶＲスタジオが設置されている。これはＶＲを駆使した近未来的

な映像を見ながらバイクなどのワークアウトが体験できる。

（エ）コワーキングゾーン

ピッチを一望できるスペースで仕事ができ、登録者同士のコミニュケーションスペースにもなっている。将来的にはスポーツを基軸としたビジネスコラボが生まれることを期待している。

（オ）スポーツクライミング

リード、ボルダリング、スピードの３種類のクライミングの国際基準を満たした室内型クライミングジムである。３ヶ月毎にストーンの配置をプロが組み直しており、国際大会も開催される。

（カ）木育ひろば

国産木を使った子供の遊びのスペースで、木の香り、ぬくもりをふんだんに感じられる。週末は大人気のスペースであり、子供の声があふれる。

（キ）保育園

2021年６月に開園した企業主導型保育園であり、合同会社ビバ＆サンガの職員のみならず近隣からも子供が通う。日本で唯一園庭がスタジアムという贅沢な保育園である。

（ク）ドローンサッカー

フードコート内にドローンサッカー常設アリーナをオープンした。ドローンをボールに見立てたサッカーのようなスポーツゲームである。ラジコンのようなコントローラーでボール（ドローン）を操作するので、年齢や障害の有無に関わらず挑戦できる。

（ケ）３×３バスケットボールコート

建物の外にあるので、誰でも無料で利用できる。

（コ）その他

貸し会議室、フードコート、足湯も設置されている。

イ　集客数

コロナ明けの令和３年はＪリーグ、そのほかイベント含み約30万人だったが、令和４年は約42万3000人で40万人目標を上回った。

ウ　質疑概要

Ｑ　スタジアム以外の施設が充実し複合的な施設になっていることに驚いたが、なぜなのか。

Ａ　京都府立京都スタジアムが正式名称だが、にぎわいづくりをメインに施設づくりが行われた。通常サッカースタジアムはサッカーの試合以外は人が訪れないが、平日でも人が訪れ日常的に使っ

てもらえるコンセプトで造られた。そのため、フードコートや木育ひろば、保育園、ｅスポーツゾーンから国際大会が開催できるクライミング施設まで幅広い方たちに使ってもらえる施設が入っている。

Ｑ　集客(延利用者数)目標が10年以内に年間40万人だったものが、コロナ明けすぐの令和４年に42万2000人に達した理由は何か。

Ａ　ここに来ないとできないものとして、国際基準を満たした室内型のロッククライミング施設があることは大きい。また、天候に左右されないこともあり、京都市内からだけでなく、関西圏全域から訪れる。平日の日中は年齢層が高い人も訪れ、一種のクライミングの聖地となっている。

Ｑ　ｅスポーツの取組はどのようなことを行っているのか。

Ａ　指定管理者の合同会社ビバ＆サンガが直接取組を行っており、大会誘致や運営だけでなく、人材育成のためのプログラミング教室なども開催している。また、地域の大学生に大会の運営や映像配信などの裏方を経験してもらうサポートも行っている。

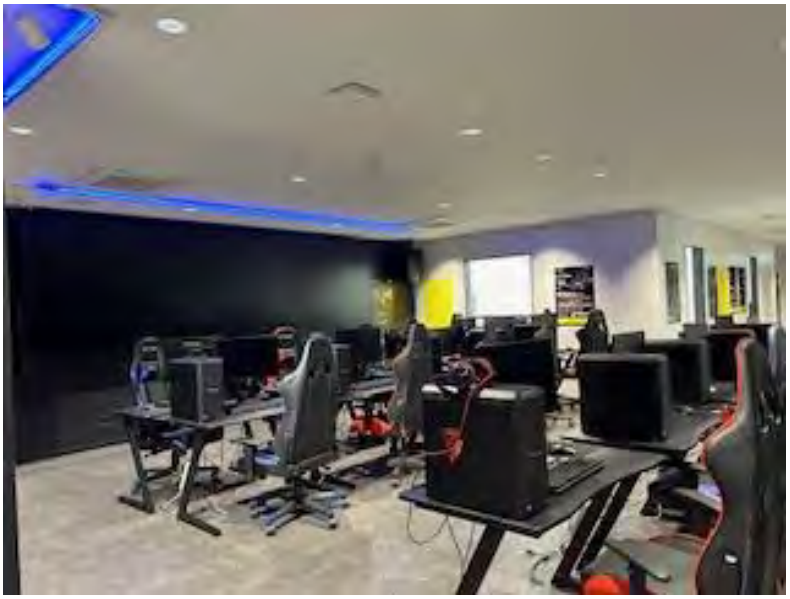
（２）委員所見

京都パープルサンガというプロサッカーチームのホームスタジアムを基軸として多角的な取組みをしていると感じる。スタジアムというのは一般人にとっては、スポーツを「観る」ということが中心になりがちだが、様々なスポーツを「する」、つまり体験する・参加するチャンスの提供、さらに先端技術の実証と人材育成、地域のにぎわいつくりやコミュニティの創出など、キーワードとしてスポーツの可能性を体現しているように思う。

京都パープルサンガは元々、人材育成や教育にも力を入れてきたが、ｅスポーツなどに最近注目する自治体も多く出てきており、公共施設の中にある場所という安心感を与えている。一方で、日本では未成年の子が優勝したときの賞金の問題など解決しなければならない課題もある。世界的にも注目を集める競技として国としても議論を推し進めていく必要性があるのと思う。

高齢化社会を迎え、一人ひとりの健康つくりはもちろんだが、どの競技においてもスポーツは個人から地域、ビジネス、社会全体への広がりをつくる施策として自治体も活用をさらに推し進めていく意義があると考える。

（グラウンドにて）



（ｅスポーツゾーン）

視察概要

１　視察先

大阪府東大阪市

２　視察月日

１月16日（火）

３　対応者

都市魅力産業スポーツ部花園・スポーツビジネス戦略課課長　（受け入れ挨拶）
議会事務局議事調査課総括主幹　（説明者）
議会事務局議事調査課主任　（説明者）

４　視察内容

（１）誰でも楽しめるウィルチェアスポーツの振興について

ア　整備に至る経緯

東大阪市は、ラグビーワールドカップ2019™、東京2020オリンピックを控えた2017年に「スポーツのまちづくり戦略室」を新設した。同年10月に、ウィルチェアスポーツコートの前進となるウィルチェアスポーツ広場を、大阪府から借り上げた浄水施設の上部利用駐車場に整備した。車椅子ソフトボールの大会など、インクルーシブスポーツの普及に貢献があったと実感するが、広場にはトイレがないことなどが大きな課題であり、新たな施設整備が検討されることとなった。

イ　新施設の特徴

ラグビーの聖地として発展してきた花園ラグビー場にウィルチェアスポーツコートを整備することで、障害の有無に関わらず利用者がともにスポーツを楽しめる「聖地花園」とすることを目標に掲げた。車椅子スポーツ施設はそのほとんどが屋内型のため、広い場所を必要とするラグビー、ソフトボール、ハンドボール、バスケットボール、ボッチャなどのスポーツが全国大会を開くなど定着している。また、競技用車椅子の無料貸し出しをし、障害のある人もない人も同じルールの中で競技することができる。

ウ　質疑概要

Ｑ　設備の利用率は目標に至っているのか。

Ａ　目標を達成していないため、工夫が必要である。高齢者の利用

に拡大することも考える。

Q　子供の利用状況はどうなっているのか。

A　市内の小学４年生に体験してもらっている。

Q　設備の利用率以外に課題はあるのか。

A　駐車場が不足している。敷地面積に限度があるため公共交通機関の利用を促している。

（２）委員所見

利用者貸出のウィルチェアーを借りてコート内を移動したり、バスケットボールをゴールにシュートする体験をさせていただいたりした。過去に通常の車椅子体験や他の車椅子スポーツの体験をしたことがあるが、さらに性能が良いと感じた。屋外での体験は初めてのことで、遠方の美しい景色や広がる青空、走行時の風を切る体験は格別なものがあり、ウィルチェアスポーツならではの爽快感を味わうことができた。

こういった体験を通じて、「障害」が「欠如」というイメージから、「プラス」のイメージに変わる人も多いと想像でき、ウィルチェアスポーツコートが、身体と心のバリアフリーの社会を実現に寄与すると考える。

ウィルチェアスポーツコートと花園ラグビー場がある花園中央公園は、ほかに東大阪市民美術センター、多目的球技広場、児童文化スポーツセンター、野球場、多目的芝生広場、リクレーション広場、花しょうぶ園、ドッグランなどが存在する複合的な施設であり、さまざまな年代の人がさまざまな価値に引かれて集まる特徴があることから、多様な理解とバリフリーに結びつくと考える。

最寄りの駅である東花園駅から花園中央公園まで続く街には、バナーフラッグなどが多数掲示されていたり、道沿いの和菓子屋ではラグビー饅頭なども販売されていたりしており、花園ラグビー場が地域全体のブランドとして地域に認められていることがよく理解できる。スポーツと福祉の融合が持つ力について、本市でも市や区単位でも認識をさらに深め、市民区民を巻き込む施策を実現するべきである。

今回、ウィルチェアスポーツコートの視察の後に花園ラグビー場内部も視察させていただいた。施設は大きなスクリーンや座りやすい客席など新しい設備に改修されているが、歴史と伝統を感じる古い躯体は残してある。また、施設内に沿革を紹介する展示スペースもあり、参考になった。

（会議室にて説明聴取）

（花園ラグビー場にて）